



Sapporo Gakuin University

学園広報

2003.12.10 No.86

編集・発行 札幌学院大学 企画調査室
〒069-8555 北海道江別市文京台11番地
電話 (011)386-8111
http://www.sgu.ac.jp

今年で十六年目を迎える本学「オープンキャンパス」が七月三十一日及び九月二十七日に本学キャンパスで開催された。この「オープンキャンパス」は、志望校を決める上で重要なイベントとされており、最近では、親子で参加される方も多く見られるようになった。本学でも、全学的な協力のもと、教職員・学生が一体となって準備・運営を行い、その成果もあつてか、今年も一、三六五名(夏八〇八名、秋五五七名)の高校生・保護者等を迎えることができた。石狩圏を中心に、道内各地をはじめ、東北地方や東京、新潟、愛知、広島などの遠方からも参加された。

今年の実施内容は、全学科十六講義を用意した「ミニ講義」を中心に、入試や学科、就職、資格など、さまざまな相談に応じる「個別相談会」、学生スタッフが学内の施設を案内する「キャンパスツアー」さらに「クラブ見学」「体験学習」「無料科学体験」などを実施した。特に今年は一、三六五名(夏八〇八名、秋五五七名)の高校生・保護者等を迎えることができた。石狩圏を中心に、道内各地をはじめ、東北地方や東京、新潟、愛知、広島などの遠方からも参加された。

「夏と秋の開催に1,365名」
オープンキャンパスは、今年で十六年目を迎える本学「オープンキャンパス」が七月三十一日及び九月二十七日に本学キャンパスで開催された。この「オープンキャンパス」は、志望校を決める上で重要なイベントとされており、最近では、親子で参加される方も多く見られるようになった。本学でも、全学的な協力のもと、教職員・学生が一体となって準備・運営を行い、その成果もあつてか、今年も一、三六五名(夏八〇八名、秋五五七名)の高校生・保護者等を迎えることができた。石狩圏を中心に、道内各地をはじめ、東北地方や東京、新潟、愛知、広島などの遠方からも参加された。

2003年度第1回「オープンキャンパス」(ミニ講義)開講一覧

時間	対象学科	テーマ(内容)
1講時 12:00~12:40	商学科	ケイタイが変えるマーケティング
	社会情報学科	3DCGで表現する自分の世界
	法律学科	過労死・過労自殺と労働法の課題
2講時 13:00~13:40	人間科学科	人口高齢化は「問題」か?
	経済学科	なぜ不良債権問題は解決しないのか?
	英語英米文学科	海外留学への誘いーイギリスを中心にー
3講時 14:00~14:40	社会情報学科	カメラを持って街に出よう!
	臨床心理学科	心を理解することの楽しさ
	人間科学科	むかしむかしを捜査する
4講時 15:00~15:40	商学科	会計専門家になってみよう!
	全学科	文章書きは学べる技術
	法律学科	法律の文章はなぜ難しい?

「実際に教授や在学生の方とお話ができ、分らなかつた事や不安に思っていた事が解決でき、やる気も増えました。」「初めてのこういう講義を聞いたが、共感すること、疑問を持つこと、考えさせられることがあった。すごく面白かった。」「今までに行つたオープンキャンパスの中で、とても通つてみたいという気持ちがあつてくる内容でした。」「といった好意的な意見が非常に多く、本学の教職員や学生さらには学内の雰囲気や伝わつたという手ごたえを感じる事ができた。また、実際に大学に来て見たことによつて気持ちが変わつたという参加者が多数いることがアンケートから見受けられ、オープンキャンパスだけでなく、日常的にも高校生などが気軽にキャンパスに来られる環境作りが大切だと感じたところである。



平成15年度 科学研究費補助金の採択状況

No	研究代表者	研究種目	研究課題	申請額	区分	交付金額(対象期間)	学部
1	臼杵 勲(共同)	特定領域研究	北東アジア中世遺跡の考古学的研究	16,000	新規	12,000(H15~H19)	人文
2	内田 司(共同)	基盤研究A	新たな都市・農村関係の創造を探究する実証的研究	2,300	継続	2,300(H12~H15)	人文
3	沖田 庸高(共同)	基盤研究B	顔・表情応答電位を用いた対人認知処理の時間特性に関する研究	12,650	新規	5,700(H15~H17)	社情
4	滝沢 広忠(共同)	基盤研究C	社会・文化的視点に立った聴覚障害児・者の心理査定に関する実践的研究	1,600	継続	1,600(H14~H15)	人文
5	小内 純子(個人)	基盤研究C	地域メディアの広がり住民間ネットワークの形成に関する研究	600	継続	600(H13~H16)	社情
6	谷沢 弘毅(個人)	基盤研究C	戦前期日本における高所得層の変動メカニズムに関する実証研究	1,800	継続	1,800(H14~H16)	経済
7	奥田 統己(共同)	基盤研究C	アイヌ語諸方言の調査・資料の保存・整理・公開版作成と資料アーカイブの構築準備	5,000	新規	1,400(H15~H17)	人文
8	小出 良幸(個人)	萌芽研究	博物館と社会的弱者による新しい自然史リテラシーの開発	600	継続	600(H13~H15)	社情
9	山田 智哉(個人)	若手研究B	正準相関分析における次元縮約並びに変数選択に関するアルゴリズムの研究	4,840	新規	3,100(H15~H16)	経済
10	岩壁 茂(個人)	若手研究B	初期面接における作業同盟の役割に関する研究	4,900	新規	1,600(H15~H17)	人文

平成15年度科学研究費補助金 件数・額とも高水準を確保

本学では教員の研究を促進する方策を講ずる一方、学外の研究資金の獲得に力を入れております。その中心は文部科学省から交付される科学研究費補助金です。平成十五年度は表のとおり十一件の採択がありました。今後これらの研究成果が教育に生かされることを期待します。



地域社会マネジメント研究科

寺島実郎氏を迎えて特別授業

テレビンボジウム
国際化を迎えた北海道の
マーケティング戦略

日本総合研究所理事長
寺島実郎氏の他、放送大学長
丹保憲仁氏、北海道大学スラ
ブ研究センター教授 荒井信
雄氏、日本政策投資銀行北海
道支店長 長岡久人氏がパネ
リストとして参加し、北海道
が躍進するロードマップを探
ったシンポジウム。地域社会
マネジメント研究科 河西邦
人助教授がコーディネーター
をつとめた。

八月二十三日(土)、ST
Vから「北海道再生に秘策あ
り・国際化の道」の題名でテ
レビ放送され、具体的な提言
の多いシンポジウムと好評だ
った。



右、寺島実郎氏 中、上田陽三研究科長 左・高須喜久男教授

プロジェクトマネジメント序論

地域社会マネジメント研究科教授 高須喜久男

もう夏休みが始まった
七月二十六日は、今春、初め
て大学院に関わるようになって
た私には印象的な一日であ
った。午後から、STV主催・
本学後援のテレビンボジウム
「国際化を迎えた北海道の
マーケティング戦略」が行われ、
ゲストの一人寺島実郎さん
をお迎えして、地域社会マ
ネジメント研究科の私の授業
枠で「特別授業」を開催する
ことができたのです。

彼は同じ時期に三井グル
ープで似たような価値観を持
って仕事をされた経験があり、
彼の話は院生の皆さんに直接
聞かせておきたかったのだし
た。限られた時間に集中的に
知識を詰め込んで資格を取
得するの必要なことですが、
偉大な人との出会いによる感
動が人生を変えることが多い
からです。

問題が山積みとなり、将来
のビジョンが描けない状況
では、優等生よりは勇気を持
って未来に挑戦する人が必要
です。また、一人では出来な
くても、チーム(プロジェクト)
を組んで、リスクを分散し
ながらノウハウを持ち寄っ
てハードルをクリアしていく
科学的な手法も大役に立ち
ます。
そのトレーニングに、先ず
「マイプロジェクト」を企画
してはどうかと寺島さんは提
案されました。自分のこれか
らの人生設計をプロジェクト
として考えてみるということ
です。これが院生に対する夏
休みの宿題になりました。

就職内定者の手記

私のチャレンジ

「努力＝自信」

㈱北洋銀行内定
商学部第一部商学科四年
生 田 浩



就職活動の極意、それはど
んな問題が出ようかを聞か
れようが、全くとして恐れる
ことのないよう自信を保ち続
けることであると私は思う。
就職活動に臨む前、もしくは
就職活動期間中にどれだけ多
くの努力した経験を積み、揺
ぎ無い自信を獲得できたか
によって結果が分かれてくる
のである。

「努力＝自信、私が幼い頃
からずっと心に留めてきた言
葉である。自分自身の経験か
ら努力と自信が直結している

「目標に向かって努力を惜しまず」

札幌市福祉事務内定
人文学部人間科学科四年
生 田中 洋祐



はじめのうちは特にどこを
受験したいか決まっていなく
「公務員試験は難しいもの」
としか考えていませんでした。
それが三年生でボランティア
活動に参加したのがきっかけ
で札幌市の福祉の仕事に携わ

「先ずは行動を」

㈱エイチ・アイ・デイ内定
社会情報学部社会情報学科四年
生 脇坂真美子



私が就職活動をする時に
最初にぶち当たった壁は、
「自分がどういう職業につ
きたいかわからない」とい
うことでした。基盤となるも
のがわからず悩んでいました
が、それでも、時の流れとい
うものは止まってくれない
ので、とりあえず就職ガイダ

教職員人事

- ◎採用
平成十五年九月一日付
須貝 恵一
財務部財務課
高橋 晃治
(総務部総務課人事係長)
- ◎異動
平成十五年六月十六日付
松田 昇一
(総務部総務課長)
- 末永 文乃
教務部教務課
川村 正志
(図書課長)
- 石田 節子
(学生部学生課長)
- 近藤 直文
(財務部管財課管財係長)
- 大川 幾子
(教務部学務課)
- 山口 清
(教務部教務課教務係長)
- 松田 昇一
(教務部教務課長)
- 鈴木 仁
(教務部教務課長)
- 野中 正士
(教務部学務課長)
- 白鳥 優子
(教務部教務課)
- 伊藤 博
(総務部総務課)
- 佐藤 鮎美
(財務部財務課)
- 中澤 秀雄
(助教授)
- 管野 純一
(財務部管財課)
- 山本 勝
(教務部教務課)
- 山本 勝
(教務部教務課)
- 甲斐 陽輔
(教務部教務課教務係長)
- 小野寺順子
(教務部学務課)
- 中鉢 哲也
(教務部学務課)
- 二口 利昭
(教務部学務課)
- 白鳥 優子
(教務部教務課)
- 伊藤 博
(総務部総務課)
- 佐藤 鮎美
(財務部財務課)
- 中澤 秀雄
(助教授)

情報メディアと市民生活

土曜公開講座

今年で二十四回目を迎えた土曜公開講座「江別市教育委員会共催事業」は社会情報学部が担当し、「情報メディアと市民生活」というテーマで札幌学院大学、江別市大麻公民館を会場に十回にわたって行われた。

情報メディアと一口に言っても、テレビ、ラジオなどの従来からあるメディアのほか、インターネットを使ったWebメディアも加わり、私たちの生活の中には様々な情報メディアが浸透してきている。そこで、身近なメディアから最近のメディアまでを題材に、メディアをめぐる今時の状況の理解を深めることを目指した。

前半の五回はインターネットを対象とした講義を行った。まず、インターネットの仕組みや、電子メール、ホームページの使い方などの解説から始めた。ついで、情報発信の手法の一つとして、動画画像や、コンピュータグラフィックスによる処理技術について解説した。インターネットは誰もがアクセスできるといっていいが、いつでもどこでも情報にアクセスできるという大きな利点がある反面、情報漏洩問題のようなセキュリティの強化といった課題もある。このような現在直面している課題の解決方法についても考えてみた。また、本学部では、すべての学生がノートパソコン

を携帯し、講義等で活用しているが、それらの教育の実践例なども紹介した。

後半の五回は新聞、ラジオ、テレビなどの身近なメディアを取り上げた。まず、道民のくらしの中のメディアとして、北海道の地方新聞、地方放送局の取り組みや課題について取り上げた。現代は「読み書きの能力」のほかに、情報を分析する能力も必要であるため、実際のテレビ番組を題材に、分析の方法と分析することの意味について考えた。最後に、市民自らが情報を発信するコミュニティFMやインターネット放送局のような市民メディアの活動を紹介します。

情報メディアと一口に言っても、テレビ、ラジオなどの従来からあるメディアのほか、インターネットを使ったWebメディアも加わり、私たちの生活の中には様々な情報メディアが浸透してきている。そこで、身近なメディアから最近のメディアまでを題材に、メディアをめぐる今時の状況の理解を深めることを目指した。

後半の五回は新聞、ラジオ、テレビなどの身近なメディアを取り上げた。まず、道民のくらしの中のメディアとして、北海道の地方新聞、地方放送局の取り組みや課題について取り上げた。現代は「読み書きの能力」のほかに、情報を分析する能力も必要であるため、実際のテレビ番組を題材に、分析の方法と分析することの意味について考えた。最後に、市民自らが情報を発信するコミュニティFMやインターネット放送局のような市民メディアの活動を紹介します。

アンケートには、今後はいろんなメディアを活用していきたい」といった感想もみられ、これを機会に、様々な角度から情報メディアを利用して頂ければ幸いです。

社会情報学部教授 小内純子

回数	日程	講師	テーマ
①	5/10	長田 博泰教授 斉藤たつき教授 金 明哲教授	ITと情報技術 —インターネット入門—
②	5/17	新國三千代教授 皆川 雅章教授	インターネットの活用技術
③	5/24	佐藤和洋助教授	インターネット利用(1) —医療福祉への活用—
④	5/31	千葉 正喜教授 森田 彦教授	インターネット利用(2) —教育への活用—
⑤	6/ 7	佐藤 友暁講師	インターネットの課題と未来
⑥	6/14	高橋 徹助教授	北海道民のくらしと情報メディア
⑦	6/21	中澤秀雄助教授	21世紀北海道のテレビ局
⑧	6/28	大國充彦助教授	メディア・リテラシー —テレビ番組を分析する—
⑨	7/ 5	井上 芳保教授	近未来SFの構想力 —情報化社会を読み解く—
⑩	7/12	石井 和平教授 小内 純子教授	市民からの情報発信

今年度の商学部公開講座は「情報技術と情報産業の未来」というタイトルで、九月一日から六日までの期間に開催された。情報技術はPC(パーソナルコンピュータ)の普及、インターネットの発展、携帯電話、さらには情報家電の普及によって、今や我々の日常生活に欠かせないものとして浸透してきている。そして我々はその恩恵を当たり前のように享受しているわけであるが、その背後には情報技術の飛躍的な発展を実現し続けている情報関連産業の努力が存在する。

この公開講座では、情報産業多彩なあり方を受講者に肌で感じ取ってもらうことを狙いとして、ベンチャー企業と大手企業、地域中心の企業とグローバルな企業、ハードウェアとソフトウェア、非営利

企業と営利企業、技術と経営といった様々な切り口で、情報産業の現状とその未来の展望を、実務家の経験を通して講演していただく形式をとった。

九月一日は、小型のハードウェアを中心に大手企業とは一線を画した切り口でユニークなビジネスを展開する株式会社エイトイーエフの佐々木邦俊氏に、大学等研究機関と連携して行う夢のある事業の展開について語っていただいた。九月二日は、株式会社日立製作所情報・通信グループ事業企画本部の真野宏之氏に、大手企業の情報家電を中心としたユビキタス社会実現の取り組みについて語っていただいた。九月三日は、ダットジャパン株式会社武田政司氏に、札幌のITベンチャーのさきがけとしての、起業

における苦労や経験を語っていただいた。九月四日は、NTTコムウェア北海道株式会社の藤原利氏に、情報産業における様々なプロジェクトのマネージメントをされた経験から、IT系プロジェクトを成功に導くための秘訣や心得を語っていただいた。九月五日は、北海道総合通信網株式会社営業推進部の佐藤哲夫氏に、地域、特に北海道における情報ネットワーク基盤の現状や、未来の戦略について語っていただいた。九月六日は、沖繩のNPO法人OSPIのロバート・ホーキンス氏に、情報の分野における非営利活動の意義について語っていただいた。

全体的には技術的な話題と経営的な話題が適度にちりばめられた内容の講座となっており、情報技術に関心が低い

受講者層にはやや技術的に難解な部分もあったが、情報技術に興味を持つ経営系の受講者には適した内容であったと思われる。

また、今回は、商学部公開講座としては初の試みとして、ほくでん情報テクノロジー株式会社および北海道総合通信網株式会社の協力により、六日間におたる全講演内容のインターネットライブ中継を実施した。回線の混雑を考慮して、中継実施のアナウンスを本学ホームページのみにとどめたが、それでも予想を上回る同時接続数が記録された。中継の視聴者からも、画像や音声に関してのおおむね好評をいただいております。今後の公開講座の公開方法に際して一つの方向性を示すことができたのではないかと考えられる。

(商学部助教授 渡邊慎哉)

商学部 公開講座 情報技術と情報産業の未来

人文学部公開講座

現代社会の 新潮流 / ニューウェーブ

人文学部人間科学科の人間論特殊講義は「21世紀の人間科学」を基本テーマに掲げて、昨年からの公開講座として行われてきました。二度目の今年度は、共通テーマに「現代社会の新潮流/ニューウェーブ」を掲げ、九月一日(月)～六日(土)に、本学で行われました。

今年度は、社会的行き詰まりや機能麻痺など閉塞状況にある現代社会の現実に対して、新たな活動スタイルによって、社会問題の解決に立ち向かう動きが急速に広がっていることに着目し、それらを「ニューウェーブ」と捉えてテーマを設定しました。

講師の方々はそれぞれ北海道の各地で新しい社会的セクターの活動に携わっている実践者の方々です。個別テーマは「エコビジネス」、「ボラン

ティア・NPO」、「ワーカースロウフード」、「地域通貨」、「スローフード」などを取り上げました。

各講師には自ら関わっているボランティア活動やNPO等の新たな登場してきた社会諸活動の現状や問題点を、ご自身の実践の関り方も含めてお話いただき、それらの諸活動の実態をベースに、それらの現代社会における意義や今後の可能性を探っていただきました。特に最終日には、フレッチのシェフとして著名な三國清三さんに「登場したけど、国清三さんに「登場したけど、振返りつつ人間にとっての「食」の重要性を強調され、自分今取り組んでいる小学生に対する「食育」の実践活動を紹介しながら、学生たちに「スローフード」「スローライフ」の意義を熱く訴えていました。

今年も、学生に混じって毎日三十〜四十名の社会人の方々が参加されて、熱心に質問されるなど、公開講座ならではの雰囲気は何れもありません。

この講義に対する受講者の反応は様々ながら、「現在生起している新たな社会的活動に共通するのは、自然と地域と行政と共に生きるという「共生」、また市民自らの「自立と自律」による市民的公共性の「再生」の意味が込められていることが分かった」などの感想が寄せられています。

21世紀という現代において「新しい生き方」を模索する人々から、多くのことを学ぶことができました。一週間の活動(人文学部助教授 酒井恵真)

日程	テーマ	講師
9/1 (月)	現代社会の新潮流 —近代社会システムの超克をめざして—	札幌学院大学 酒井恵真
9/2 (火)	NPOと行政、地域との協働	黒松内ぶなの森自然学校 高木晴光
9/3 (水)	もう一つの働き方 —ワーカースロウタイプの魅力と可能性—	NPO法人北海道子育て支援 ワーカース 長谷川敦子
9/4 (木)	未来を拓くボランティア	ボランティア活動アドバイザー 伊藤規久子
9/5 (金)	地域通貨(クリン)における課題と展望	NPO法人くりやまコミュニティネットワーク 長谷川誓一
9/6 (土)	スローフード運動が目指すもの	北海学園大学 太田原高昭 フランス料理人 三国清三

「札幌学院評論」の表紙を募集しています!!

「札幌学院評論」は本学の広報誌として学生、父母、同窓生をはじめ大学を取り巻く人々から広く愛読されております。創刊以来毎号、教職員、学生、同窓生に登場いただきありがとうございます。今般、表紙につきましても学生、同窓生の作品を採用したく下記の要領で募集することにしました。第28号(2005年3月発行予定)の表紙に使用されます。奮ってご応募下さい。また、該当すると思われる方をご存知でしたら是非応募をお勧め下さい。

札幌学院評論 28号

特集 ● NPOと大学

①応募資格 本学生、同窓生、教職員。
②対象作品 油絵、水彩画、写真、CG、その他表紙としてふさわしいもの。具象、抽象等ジャンルは問わない。標題「札幌学院評論」「第28号」を作品に取り込むか別にすることは自由。
③サイズ・色 掲載サイズは19.7cm×20.5cm。カラー(場合によってはモノクロも可)。
④提出物 略歴(入賞歴含む)。自作品のハガキ大カラー写真1枚。1人3作品まで応募可。
⑤募集機関 2004年3月末。
⑥発表 採用の可否は2004年5月末に通知します。
⑦その他 採用作品には謝礼を贈呈します。
⑧提出先 069-8555 江別市文京台11 札幌学院大学企画調査室 TEL011-386-8111 (内線3112)

